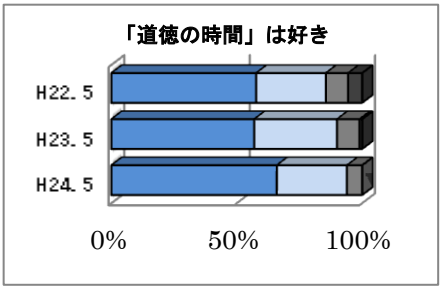
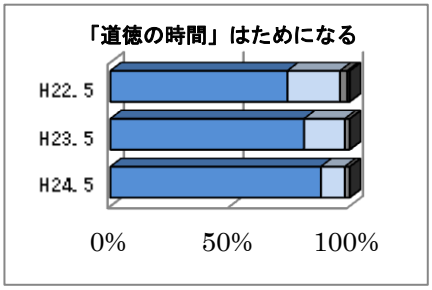
Ⅲ　研究のまとめ

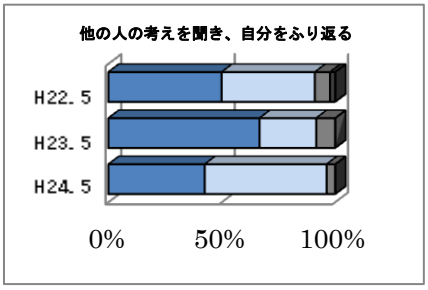
研究の検証　「児童生徒の意識等調査（平成２２～２４年度）」から

①道徳の時間

そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない







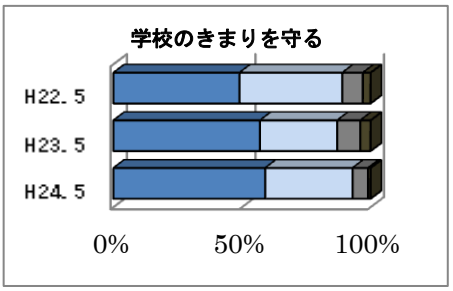
◇「道徳の時間は好き」について肯定的な児童は年々増えている。「そう思う」と答えた児童の割合が増え、「どちらかといえばそう思う」と合わせると、９割を超えている（H24.5 調査　94%）。

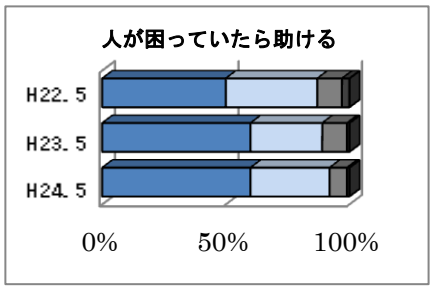
◇ほとんどの児童が「道徳の時間はためになる」と感じており（H24.5 調査　98%）、「そう思う」と答えた児童が増えてきている（74%→81%→88%）。これは、道徳の時間の中で、資料を通して、いろいろな人の生き方、友達の意見等にふれながら、自分とのかかわりで道徳的価値をとらえてきた結果であると考える。

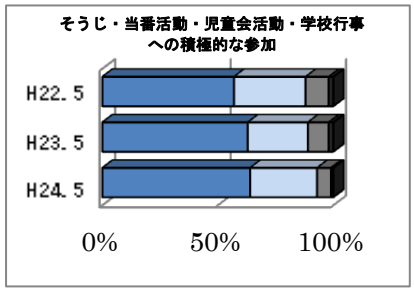
◇「自分をふり返る」については、100%に近い児童が肯定的に感じている反面、「そう思う」と自信をもって答えている児童が減った。友達の意見を聞きながら、自分自身を客観的に見て、人と自分を比べながら、今の自分はまだ不十分だと考えるようになったのではないかと考えられる。

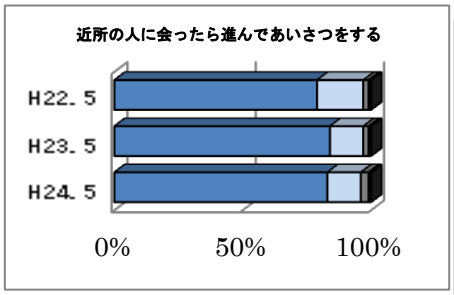
②道徳的実践

そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない









◇本校の道徳的実践の重点指導内容は、「あいさつ・安全な行動・学校美化」である。その中でも「あいさつ」については、ほとんどの児童がよくできている。研究２年目から「進んでできる」割合が増え、今も持続しているといえる。(H24.5 調査　96%)

◇他の３項目については、「そう思う」の割合は低いが、年々高くなってきている。「どちらかといえばそう思う」と合わせると、９０%を超える児童が「できている」と感じているのは、地道に道徳的実践の指導を続けてきた成果だと考えられる。

◇これらの結果から見ても、道徳授業がすぐに実践として現れるわけではないが、日々意識して指導を続けていくことで、徐々に児童が変容してくるということがわかった。

成果と課題

①道徳教育推進体制づくり

○校長の方針のもと、道徳授業の改善、道徳的実践の指導の充実、そして、道徳教育全体の充実に向けて、校内研修体制を整備し、研究企画委員会や道徳授業改善及び道徳的実践に関するプロジェクトチーム（以下「ＰＴ」）を活用しながら、全教職員の参画により、学校全体で組織的に道徳教育を推進することができた。

○道徳教育全体計画、道徳の時間の年間指導計画、研究推進計画等に沿って着実に研究と実践を積み、道徳の時間の授業研究、各年度の研究集録、そして、最終年度は研究紀要の作成等を通して、これまでの研究成果や課題を整理し、明確にすることができた。

○道徳教育推進教師及び教職員が、「道徳教育推進リーダー育成研修」や県内外の道徳教育に関する各種研修会･研究会等に積極的に参加し、研修成果を校内に還元し合うことで、研究実践の質が年々向上してきた。特に、道徳教育推進教師は、教材教具及び参考資料の作成、研究物等の整理など、道徳教育推進のための校内環境整備に努めたほか、道徳授業の話題を学級担任等と話す機会を多くもつことで、連携が深まり、教員全体の道徳教育への意識を高めることができた。

●道徳教育全体計画、統合指導計画、各教科等との関連表、道徳の時間の年間指導計画（特に主題配列）については、学校の取組や児童の実態等をもとに常に見直し続けるとともに、他の教育活動との関連をより深く意識した意図的計画的系統的な道徳教育の取組となるよう改善を図っていく。

●この３年間で、道徳教育に関する考え方や取り組み方は一段と進化し、共通理解が深まった。今後は、道徳教育推進教師が専任（加配教員）でなくても、道徳教育の研究実践が継続・発展していくよう、各種研修会等への参加に努めるとともに、道徳の時間の設定や道徳教育の取組方策、そして校内研究への位置づけを工夫していくようにする。

②心を耕す道徳授業づくり

○この３年間、道徳授業の質的改善のため、道徳教育推進教師と研究主任をリーダーに、研究授業や公開授業を計画的に実施し、着実に授業研究を重ねてきた。授業協議の視点に改善を加え、子どもや参観者による授業評価も活用し、研究協議の方法にも工夫を加えることで、授業の質、研究協議の質が高まった。

○低・中・高学年のブロック研修など、少人数による研究活動が奏功して、道徳授業研究に関わる考え方（理論）や指導方策（方法）が豊かに語られ、一人一人の関与性や意識の高まりがみられた。

○道徳教育推進教師が、きめ細かに各学級の週一時間の道徳授業の計画段階の相談助言や準備支援と授業後の振り返りにあたり、学級担任の授業改善意識を高めながら、日常的な道徳授業の充実を具現化してきた。また、２年目からの西部教育事務所道徳担当指導主事等の定期的な訪問授業観察及び指導助言も各担任の授業力向上と日常的な道徳授業の質的充実に繋がった。

○授業力診断シートについては、特に若手教員と転入教員の道徳授業力がアップしており、各年度当初に課題とされた学級間の格差が改善し、質が揃うことに繋がった。また、児童による授業評価も、各要素とも概ね高得点をあげている。

●日常的な道徳授業の充実のために、継続して、教材教具、参考資料、指導略案、板書記録等を残し続けていく。

●各学年の年間指導計画（資料、展開の大要、他教科等との関連等）を綿密に見直し、より意図的統合的な指導計画と道徳の時間としていくようにする。

●資料分析、指導内容・指導目標、発問、指導過程の研究を継続して深めるとともに、授業においては、各教科等の指導と併せ、表現(言語)活動の充実をさらに意識して、児童の発表（表現）力を高める必要がある。
●３年間研修を深めた発達段階を踏まえた道徳授業、研究テーマと深く関連した「価値理解、他者理解、自己理解」の考え方を生かした道徳授業をさらに深く追究し、機会があれば、今後も授業公開や研究実践の報告発表にも鋭意努めたい。

③道徳的実践の指導

○「あいさつ、美化活動、安全な行動」を重点とした道徳的実践については、児童理解・実践活動ＰＴを中心に指導を続けてきた。より効果的な指導を求めて、「だれが、どんな場で、どんな指導ができるのか」を具体的に話し合い、全体に呼び掛け、「全職員で全児童を指導していく」というスタンスで取り組んできた。その結果、一年目より二年目、二年目より三年目と、徐々にではあるが、児童の意識の高まりや行為・行動の変化が見受けられるようになってきた。
○特別活動との関連を図るため、児童会活動・委員会活動の企画・運営を児童主体のものへと変えていった。まずは、各委員会での取り組みや呼びかけたいことを決め、そのためには自分たちが責任を持って役割を果たすこと等について指導してきた。児童朝会で各委員会から報告や呼びかけをする場面を増やし、取組内容が全校児童に伝わるようにした。
○最終年度の高学年の児童に「中村南小学校の自慢できること」をたずねたところ、「いつも元気にあいさつができる」「下校の態度がよくなり、並んで帰れている」「そうじを一生懸命する」など、道徳的な行為・行動をすることのよさについての気づきがみられた。児童が、自分たちのことを客観的に見て判断できるようになってきつつあると感じた。
●指導は素直に聞いて行為・行動は直せるようにはなってきたが、自主性主体性にまだまだ課題が残る。学級活動の充実も図りながら、良くなったことも、直していくべきことも、自分たちでみつけ、改善策を考え、行動に移していけるような児童、学級・学校集団へと高めていきたい。

④研究の普及

○３年間継続して、年間３回（各学期１回）の道徳教育公開授業研究会を開催し、研究授業や研究協議を公開するとともに、全国レベルの講師を招聘し、道徳教育推進の視点や方向性、課題解決に向けた示唆をいただいたことが、研究実践の質の向上に繋がった。
○四万十市・三原村道徳教育推進地区協議会、四万十市道徳教育研究会、幡多地区道徳教育研究会、高知県道徳教育研究会、高知県教育委員会、西部教育事務所等が主催する道徳教育に関する各種研究会や研修会、そして要請のあった他校校内研修、他市町村の道徳教育推進組織の会合に参加し、本校の研究実践の取組や進捗状況（成果や課題）等について、報告発表、授業提案、講話等、積極的な公開と情報提供に努めた。
○ホームページにおいて、道徳授業研究(学習指導案、板書等)、道徳的実践の指導(取組内容、児童の様子等)、道徳教育諸計画等を適宜、情報提供できた。（３年連続Ｊ－ＫＩＤＳ優秀校）
●３年間の研究実践の成果等を、今後も各種研修会や研究大会、他校校内研修、ＨＰ等において積極的に公表していく。また、今後も課題意識を持って研究実践に精励し、道徳教育の研究に関わる授業公開は勿論のこと、発表者、司会者、執筆者などを積極的に引き受け、本校の研究実践や自らの実践を公表し、情報提供するよう努める。